

竜動的知性

標本活動の限界と危機

想定外の事態が生じ、危機に直面した時。情報を収集し分析をした後で判断を下しても、刻々と変化する状況の中で後手後手にまわり、手遅れということがよくある。

情報収集や分析という行為は、飛んでいる蝶を捕まえて標本箱にピンで止めるようなもの。常に動き変化する現実を、その都度止めて見なければ評価できない。このような標本活動だけでは、事後の評価はできても、動き変化する現実に対応はできないという経験を、私達は何度も繰り返してきた。

現実是一時たりとも立ち止まってくれない。その現実柔軟に対応する知性を、私達が持たなければ、状況に対応して動くことも危機を回避することはできない。

実は、想定外の状況の中では、想定外の出会いが起こり得ることも、私達は知っている。つまり、カオスが引き起こす出会い、潜在的な可能性の浮上だ。だが、それらの出会いを危機回避に生かすためには、出会いの瞬間を見逃さず、意味や価値へと素早く読み替え、連鎖に変えていく知性が不可欠になる。

想定外の出会いや連鎖が起きる場は、人の中にしかない。そのような場になる人（判断し決断する人）に求められるのは、出会いや連鎖を妨げるのではない清々しさだ。だから、清々しさを失った人達に、判断を委ねることはできない。

しかし、今の社会には、動く現実と想定外の出会（出来事）を感じ、あるがままに動くことができる（清々しい）知性が決定的に欠如しているのではないか。それは、私達の社会に内包されている本質的な危機ではないか。

私達は、その知性を何処（自らの枠組みの外？）に置き忘れてきたのだろうか。

縄文の連鎖

最近、上野の国立博物館で開催された土偶展を観に行った。展示されていた土偶や土器を前に、縄文人の表現の力強さと豊かさ、そして計り知れない深さに圧倒された。形や文様の意味は理解できないが、強烈な何かが伝わってきた。

縄文土器や土偶の表面は、様々な文様の連続や繰り返しによって覆われている。しかし、それらは単なるパターン（標本化された文様）の連続や繰り返しではない。それらは、繰り返しではなく出来事の連鎖である。生を突き動かす衝動の連鎖が、変化し連鎖する文様（世界の現れ）となって表れているように、私には見えた。

動き中に宿る知性

数千年前に生きたこれらの作者たちには、単なる連続や繰り返しを許さない生の緊張と充実があったのではないか。人々は、連鎖の中に生の充実を求めたに違いない。その当時の人々にとって、世界は瞬間瞬間に生まれて来るものであったのではないか。すべては、動きの中から動きを持って生まれて来るという縄文人の世界観が、流動的で躍動感のある造形を実現させたのだと思う。それは、私たち現代人の理解（思考の枠組み）を越えた縄文人の知性の表れなのではないか。

思考は動く線

思考は連鎖する。思考とは連鎖や動きそのものであり、点ではなく、点と点を結ぶ線でもなく、動く線である。点は、動く線が出会い交差する瞬間にしか現れない。

縄文土器や土偶を見ていたら、ふと、頭の中に「流動的な知性」という言葉が思い浮かんできた。だが、すぐ後に、別の言葉が浮かんで来た。「いや、竜動的知性だ！」そうだ、動く線のイメージは、まさに竜。動く線になって考えるのだから、この方がいい。これでいこう。

それは、縄文人の発した連鎖が数千年の時を経て、私の中に流れ込み、私の中に眠っていた竜を目覚めさせた瞬間だった。

私の中で目覚めた竜はすぐに、語りかけてきた。数多の危機を孕む未来に向けて、ひからびた標本による知性とは異なる、生きて柔軟に動く知性（竜動的知性）を社会に取り戻せ。

子どもの中に生きる竜

危機を回避できる健全な社会をつくるには、子ども達の社会参加が不可欠だと思う。大人には、子ども達の助けが必要だからだ。

子ども達は、社会の重要な一員であり創り手だ。

私は学校の授業や野外活動をとおして、子ども達と多くの時間を過ごしているが、その中で、子ども達の知性に大人たちには無い「動き」を感じている。子ども達の言葉はいつも生きて動いているから、概念で捉えるのは困難だ。だから、何でも概念で固める癖がついている大人には、子どもの言葉が理解できない。

子どもの発する言葉には、常に連鎖の芽生えがある。だから、誰かが発した言葉が、別の誰かを触発し、そこから新しい言葉が発せられ、また別の誰かが触発されといった感じで、次々と言葉と言葉が出会い連鎖していく。

言葉が自由勝手に連鎖していく中で、動く線がみんなの中に或るイメージとして現れて来る。そのイメージをみんなが共感し共有できれば、学習は一步前に進んだと言える。私の授業は、いつもそんな感じで展開していく。

子ども達の心は、権威や権力とは無縁。だから、開かれた空間を自由に動くことができる。出会うもの同士が、概念や立場の壁を越えて自由に出会える場、それが子どもだ。

子ども達の中に生きる竜動的知性を理解できなければ、大人から子どもへの生きた知識や経験の受け渡しも、本当の意味での「教える」ということもできない。

大人は、子どもから学ばなければ、何も実現できない。

しかし、そのことを知っている大人は少ない。

竜退治をする大人たち

ところが、多くの大人はそのことを理解していない。とくに、専門家や研究者は動きをかつちりと止めて理解しようとする習性がある。連鎖から差異を抜き取り、要素による反復、繰り返し（標本）に置き換えようとする。だから、状況が変わっても、変わったことを認めることができない。

つまり、学者たちは常識や定説や概念で、竜退治をしようとする。生きている蝶を捕まえて、標本箱（自らの枠組み）の中に納めピンで止めるように。

でも、竜は捕まえて標本にはできないから、そんなものはいないということになる。つまり、無縁なものとなる。

竜が棲息する島々

竜たちは、今もしぶとく生き抜いている。竜たちは、学者達の力が及ばない、無いことと在ることの間（曖昧な領域・無縁）に棲息し続けているからだ。

最近、私は竜が生き続けている離島に通い始めている。宮古島、そのさらに南にある多良間島。冬でも蝶が舞い、虫の音が絶えない亜熱帯の島は、竜の気配で溢れている。

竜は人々の中に、竜動的知性として生きている。特に、子ども達の中に生きている竜は元気だ。だから、南の島の子ども達との学習は、自由に展開して、自然に連鎖が起き、予想もつかない何かが生まれて来る。本当に楽しく創造的な時間を共有できる。

そして、授業の後には清々しさが残る。珊瑚礁の海のように明るい清々しさが。

「何もないことの眩暈」

南の島に生きる竜動的知性の原点を、私はウタキ（御嶽）に見た。かつて、沖縄を訪れた岡本太郎はウタキを訪れた時に受けた衝撃を「何もないことの眩暈」と述べた。近代を踏みしめながら沖縄文化論を展開した岡本らしい言葉だと思う。

古代からの佇まいを残すウタキは、亜熱帯の鬱蒼としたジャングルの中に今も在る。それは、確かにただの何も無い広場、ぽっかりとした空間にすぎない。ウタキは神社のようなものだが、私たちが知っている神社とはかなり様子が違う。伝統的なウタキには、祠も社殿も無い。在ってもクバ（ビロウ椰子）の神木と小さな石がひとつふたつくらいしかないからだ。

（空虚な）空間に宿る力

私は全く別の場所でも、似た感じを得たことがある。意外にもそれはウタキとは対極にあるように見える伊勢神宮だ。伊勢神宮では二十年ごとに社殿を建て替える式年遷宮が行われる。そのために、荘厳な社殿のすぐ横には、次の遷宮で社殿を建てるための大きな空地（新御敷地）がある。伊勢神宮を訪ねた時に、私がもっとも強い印象を受けたのは、この空地だった。その「空虚さ」に、私はある力の本質を感じたからだ。

その力とは何かと考えながら、ある思いが浮かんできた。人々は、その力とどの様に向き合い生きてきたのか。その力の中に何を求め、どのように生かそうとしてきたのか。

人間には、その力から何かを構築していくことも、あるいは、何も構築せずに力の連鎖が生まれるがままに、世界に力が広がっていく場にして置くこともできたのではないかと。

無いでも在るでもない清々しさ。

わたしが、南の島のウタキで得た感覚。それは、空虚さというよりも清々しさだった。その時、清々しさの中から浮かび上がってきたイメージがある。それは、力を一点に集中（構築、組織化）させないこと、力が世界の広がりそのままに連鎖していく様だった。

そして何よりも、ウタキで感じた清々しさは、私に、今生まれて来たばかりの世界（出会うものが自然に出会い、連鎖していく生の現実）をイメージさせてくれた。

宮古島のウタキで会ったオバアが言っていた。「ここは本当に気持ちいいでしょう。」その感覚は、南の島々を訪ねるうちに、私の中で次第に深まっていった。そして、あることに気づいた。

空虚さと清々しさは異なる。「何も無い」とか「空っぽ」「空虚」といった感覚は、現代を生きる私達だから生じる感覚なのかもしれないと。

一方の「清々しさ」はどうか。清々しいという言葉は、現代人がよく使う「清潔さ」とは違う。清々しさには、清潔さにはない動きがある。

そよ風になって現れる竜。

私は、古代の人々にとって「在る」ことは「あらはれる」ことであったと云う、折口信夫の言葉を思い出した。そして、ウタキの何も無い空間が、「在る」が清々しく現れるところ、つまり世界に広がる出会いの連鎖が清々しく始まる場所、人の心の中に竜動的知性が芽生えるところではないかと思えるようになった。

人も物も、この清々しさから現れてきたという充実感や開放感が、ウタキにはあった。

世界の現れがそっくりそのまま自分の中に入ってきたと感じた瞬間に、私達は清々しいという感覚を得るのでないか。それは、創作物であった自分が溶けて消え、世界である自分（現れる自分）に成った瞬間でもある。

ジャングルの中にぽっかりと開いた空間では、無いことと在ることがひとつに溶け合い、竜たちが明るい木洩れ陽を浴びながら、木の葉を揺らす風になって安らいでいた。

常に動き変化する現実。出来事が連鎖し続ける現実。生きた現実の只中で、私達を良き出会いの連鎖へと導く知性、竜動的知性は、この清々しさの中で、木の葉をそつと揺らす風のように、私達の中に現れて来るのかもしれない。

クバの葉が島風にそよぐ夜。竜の島で出会った友と泡盛を酌み交わし、オオコウモリが悠然と飛ぶ星空を眺めながら、わたしは風のほんとうの美味さを知った。

2010年3月5日

飯島 博